

カノコソウ（ハルオミナエシ）

牧 幸 男

植物の生育が最も盛んな季節は夏である。この季節の前、梅雨の時期には多くの植物は子孫を残すべく花を開く。わか国のように南北に長い国では、花期が長くなるのは当然であろう。『新訂牧野新植物図鑑』でカノコソウの項を開くと、開花は5～7月頃とある。今回の項にカノコソウを掲載したのは、この植物は花期に注目されることなく、収穫期の10月頃注目されるからである。

以前、長野県では7月になると、良くオミナエシに似た淡紅色の美しい小花が咲いていた鹿の子草に出合った。しかし、最近野生の鹿の子草を見ることは殆ど無くなった。江戸時代の『増補手板発蒙』（1829）には「ハレリアナの名称で和産あり、カノコソウ、又は春のオミナメシと呼ぶ。」と記載がある。飯沼慾齋（1782～1865）は『草木図説』（1856）で「一名ハルオミナエシ。



オミナエシの花



カノコソウの花

伊吹山中多く自生す。」と野生種が多かったこと述べている。春女郎花^{はるおみなえし}の植物名は、秋に咲く女郎花が華やかな黄色の花色であるのに対し、鹿の子草の花色は柔らかな薄紅色ないし白色で、清楚な風情があるのが由来である。

最近森林の整備が行われず、鹿の子草は乱獲により野生品は激減、現在は絶滅危惧種に指定され、栽培品のみ市場に出回っている。この植物栽培が非常に難しく、最大の難関は連作障害が著しく生産性が低いのが問題となっている。このため、一部の県では危急種に指定している所もある。

鹿の子草は、樺太、南千島から我が国全土、朝鮮半島、中国東北部に分布している。植生はやや湿った草地を好むオミナエシ科の多年草で、地下のつる枝を伸ばして繁殖する。茎は直立して高さ30～80cm、葉は対生、根葉は花時枯死する。花は、淡紅色の美しい小さな花を多数茎先につけて散房状の二岐集散花序をつける。秋に結ぶ果実は披針形で長さ4mm、風により果実を飛び散らせる。類似植物にツルカノコソウ（ヤマカノコソウ）がある。この植物は全体の質が柔軟で蔓性のため区別が可能。

日本原産の植物だが、セイヨウカノコソウは古代ギリシア時代から利用され、ヨーロッパでは鎮静効果が高い万病治療薬として知られ、保温や利尿を目的に使われてきた。我が国では江戸時代蘭方医がセイヨウカノコソウ使ってから、19世紀初頭まで輸入に頼っていた。その後、日本の鹿の子草の品質が良いので戦前には、薬や菓子の香料の原料としてイギリスやドイツに輸出していたほどだった。

我国の鹿の子草の利用は、薬用利用以前にその歴史は古く。織物が発達した地域ごとに独自のデザインが使われていた。その代表が正倉院に補完されている^{こうけつきれじ}経緯裂地（^{しょうそういんざれ}正倉院裂 ^{こんじたすきもんこうけちあや}紺地襷文縷縷綾）が有名である。当初は素朴な模様だったが、技術が進み精緻な模様が作り出されるようになると、江戸時代には生地一面に施された華麗な総鹿の子絞りの布が製造された。この布は、幕府の大名、高級官僚、宮廷の公卿、裕福な町人、そして遊里の太夫たちに好まれた時があった。この動きに幕府は天和3年（1683）、華美や贅沢を戒める目的で総鹿の子禁止令を出した経緯がある。

この植物は虫時の香り（イソ吉草酸）があり、乾燥するとその香りが強く、人によって好き嫌いがあるため、植物を身近で鑑賞することはなかった。そのため詩歌の対象にはならず『カラー図説日本大歳時記』には一種収載されているのみで、短歌にも詠まれていないようだ。

鹿子草 ^{やす}こたびも手術 寧からむ 石田 波郷

植物名は、花序の姿が桃色の鹿の子絞りに見える様子に由来している。「漢名^{きつそう*}の縝草^{かん}」は、カノコソウを漢字で書いたもので漢字ではなく、ケツソウ（キツソウは誤り）というのは医薬界の慣例である。一般に「鹿の子草」と書くと牧野富太郎博士は述べている。別名に花のつき方や葉の切れ込みがオミナエシに似ているので、春女郎花、山野鹿の子草がある。また、根に含まれる香りはインド産の香料の甘松香^{しょうこう}に似ているので和の甘松香の植物名もある。注*：絞りのこと

欧米では、ハーブでベレリアン（ワレリアナ根：代表種 Common valerian）と呼び、猫や鼠がこの臭を好むので、野良猫退治この根を餌とするので根を Cat's-trail と呼んでいる。鼠も好物なのでやはり根を餌としていたので、鼠取り屋は Rat-catcher と呼ばれていた。グリム童話「ハーメルンの笛吹き男」の物語は、カノコソウを使ったのではないかと言われている。迷信であるが、魔物はこの草を恐れて近づかないと言われ、戸にぶら下げたりしていた。

学名は Valeriana fauriei で、属名はラテン語の valeo（強くなる）を語原にした造語でこの草を用いると健康、丈夫になることを示している。種小名は明治時代植物に詳しくた宣教師のフォーリーの名である。英語では Japanese Valerian と呼ばれているが、一部では phu-plant と呼ぶこともある。この phu の言葉はあまりの悪臭で鼻をつまむときの感嘆詞でその臭気を想像していただければよい。



カノコソウの根

薬用は、ヨーロッパでは古くからベレリアンは万病に効くと言ひ、イングランド北部では Poor-man's-remedy と呼び、てんかん、神経痛、不眠症、こむらがり、頭痛等に利用してきた。又、病人用のスープに混ぜていた。ドイツでは、眠れるハーブや魔女草と呼んでいる。

我国では、根と球根の生薬名を「吉草根」、^{けつそうこん}「縝草根」と呼んでいる。ヨーロッパ産のセイヨウカノコソウと成分にやや相違があるが、代用品として『日本薬局方』の第1版(1886)から収載され現在の第18改正にまで収載が続く息の長い生薬である。利用は播種後、2年目の秋に根と根茎を使う。根を浸剤もしくはチンキ剤として鎮静、鎮痙、ヒステリー等に利用している。



花をカットしたカノコソウ



カノコソウの根の乾燥



カカノコソウの苗

鹿の子草の栽培が困難と前述したが、長野県の栽培方法、11月頃株を掘取り、小分けし翌年移植する。また、花が咲く時期に根茎を太くするため花茎を花の下から切り取らねばならない。根茎の収穫は9月下旬から11月中旬である。その時、株の一部を翌年の定植に使用する。

香料には、水上蒸留により得た精油を「吉草根油」と呼び、菓子や煙草の香料に使う。

食用関係では、独特の匂いを菓子の香料に利用している。

花言葉は、「適応力」「親切」「真実の愛情」「気さく」である。

